

ルイ・フィギエ『汝自身を知れ』における人体と死への眼差し

槇野, 佳奈子
宇都宮大学国際学部 : 准教授

<https://doi.org/10.15017/7329813>

出版情報 : Stella. 43, pp.211-220, 2024-12-18. Société de Langue et Littérature Françaises de l' Université du Kyushu
バージョン :
権利関係 :



ルイ・フィギエ『汝自身を知れ』における 人体と死への眼差し^{*}

槇 野 佳 奈 子

ルイ・フィギエ（1819-1894）は1850年代以降のフランスで本格化した科学普及活動を牽引した著述家である。19世紀フランスを代表する科学普及活動家としては他にカミーユ・フラマリオンやガストン・ティサンディエ、アンリ・ド・パルヴィルなどの名も挙げられるが¹⁾、フィギエはこれらの人物のなかでも最も早くから著作を発表していた人物である。当時最新の科学技術の歴史と進歩の状況を説明した1851年初版の『近代の主要な科学的発見の詳説と歴史』（*Exposition et histoire des principales découvertes scientifiques modernes*）を皮切りに、さまざまな科学普及本を世に送り出して同時代の読者の人気を博した²⁾。その代表作は今日の研究も言及するとおり³⁾、1867年から1870年にかけて4巻本で出版された『科学の驚異』（*Les Merveilles de la science*）であるが⁴⁾、これは『近代の主要な科学的発見の詳説と歴史』と重複する記載も多く、フィギエの読者層はこの類の科学技術の解説本を積極的に求めていたことが窺える。彼は著述家としてキャリアを開始して以降、「写真」など当時の新技術を主題に選び、専門知識を持たない一般読者に向けてその歴史やその発展状況を知らせ、近代科学で実現されうる豊かな未来を楽観的な姿勢で賛美していた。

かくして著述家として一定の名声を確立した後にフィギエが1879年に手掛けた『汝自身を知れ』（*Connais-toi toi-même*）は、いわゆる科学技術の解説本ではなく、生理学の解説本という体裁をとって出版された⁵⁾。この著作は副題に「若者および社交界の人々のための生理学の諸概念」（*Notions de physiologie à l'usage de la jeunesse et des gens du monde*）と銘打たれており、生理学を専門的に学ぼうとする層ではなく、あくまで自らの知的好奇心を満たす目的で、娯楽として読書を楽しみたい人々に向けて出版されたことが窺える。一見それまでの『近代の主要な科学的発見の詳説と歴史』や『科学の驚異』等の著作と比べると同作はやや異色の内容にも思われるが、実際の構成に踏み込んでみると、

その記述は決して生理学の枠内に留まるものではなく、著者フィギエの関心や強みを色濃く反映した、同時代の科学技術にかんする言及を大いに含むものであった。さらに、その最終章「死とは何か」については死後の魂にかんする記載についてフィギエの興味の赴くままに著述が展開され、明らかに生理学の枠組みから外れた内容を含むものであった。

本稿では『汝自身を知れ』を中心に読み解き、この著作がいかなる目的で執筆され、どのような特徴を有しているのか、読者の関心を引きつけるためにフィギエはいかなる工夫を施しているのか、そして最終章の「死」にかんする記載はフィギエの科学普及活動においていかなる位置づけを有しているのかを中心に検証していきたい。科学技術の解説をこれまで得意としてきたフィギエがあえて「生理学」を主題とした出版物を検証することで、我々は彼の著述家としての特徴や個性、その根底にある彼の意欲を浮き彫りにできると思われる。

タイトルに込められた意味と期待された役割

1867年から4巻本で出版されたフィギエの代表作『科学の驚異』では、19世紀フランスにおいて人々の日常生活に実際に役立てられていた「蒸気機関」「避雷針」などの諸技術が主題として扱われていた。これらの各技術にフィギエは一部ずつページを割り当て、それぞれの歴史や発明者の逸話を紹介している。その序文において彼は科学技術の詳細を知る必要性について以下のように説明する――

科学があらゆる側面から我々に接し、我々の生活と常に混ざりあっている以上、各人が科学知識になじんでいくことがまさに強いられている。大人であれ子供であれ、裕福であるとも貧しくとも、誰もこの種の観念に疎遠であり続けることはできない。⁶⁾

自らに身近な事柄はぜひとも知るべきである、それに無知であることは許されない、と読者に呼びかけるフィギエの方針は、1879年の『汝自身を知れ』においても引き継がれている。彼は同著の序文において、教養ある者が修得した幅広い学術知識を称えるも、その教養から抜け落ちている身近な内容がある旨を以下のように指摘する――

そして地球上で起きていること、起こったことの全てを知るのみならず、地球の土壌の構成を知り、さらには現代科学の奇跡によって地球から数十億リユースの距離をとり

まく天体を構成する固体と気体が何であるかを知ることができる。太陽には酸素と水素が存在し、火星や金星や木星に鉄、酸化マグネシウム、カルシウムが存在していることも知っている。要するに我々から何十億リユーをとりまく天体に何が存在するか答えることができるのだ。その者が知らないことはたったひとつだけ。それは自分自身のことだ。⁷⁾

このようにフィギエは自分自身の身体について目を向ける必要性を訴えており、古代ギリシア哲学では「汝自身を知れ」の格言が掲げられながらも人間の身体そのものについての探求が不十分であったと指摘する⁸⁾。彼の著作タイトルは人口に膾炙したこの格言に由来しており、19世紀に生きる読者たちが自らの身体にかんする生理学的な知識を修得できれば、真に自らを「知る」ことができると主張するものであったのだ。

ただし、フィギエは古代ギリシア哲学の威光を毀損する意図は全くないとし、たうえで、次のように読者に続けて呼びかけている――

それゆえ読者よ、高校や大学の学部で心理学、論理学、倫理を書籍や講座で学んだ後には古代人の遺産としての古典哲学の原則に基づいて、人体やその物的な力やその仕組み、その驚異的な働きを学んでほしい。⁹⁾

おそらくこの箇所には、同時代のフランス社会において高まり始めていた学校教育の拡張の気運も反映されている。実際、1881年には当時の公共教育大臣ジュール・フェリーの尽力で初等教育が無償化されるが、フィギエが『汝自身を知れ』が出版された1879年当時は、教育をめぐる現場がまさに大きな変貌を遂げようとする直前の状態にあった。先行研究によれば1880年代から科学普及活動は新段階に移行し始め、進展する公教育が科学普及活動の目標や形態の多くを引き継ぎ、初歩的な理科の内容は学校教科書に盛り込まれるようになったという¹⁰⁾。おそらくフィギエもこうした変化の兆しを1879年の時点で敏感に感じ始め、学校教育で修得するであろう知識を補完する目的で、自身の著作を役立てるよう読者に進言していたのであろう。

なお、『汝自身を知れ』の目次は「いかに消化されるか」「いかに栄養吸収がなされるか」「いかに血が巡るか」などの複数の章に分割されている。その各章は膨大な小項目に分かれており、限られた時間内でも人々が自宅で関心のある箇所だけを区切り良く読み進められる構成になっている。同書の分量は600頁

を超え、読者が全ページを短時間で一気に通読することは難しい。読書時間を十分に確保できない人々、自らの関心がある箇所だけ手短かに読んで楽しみたいと願う人々の需要にも応えられるよう、フィギエの『汝自身を知れ』では配慮がなされていたことが窺える。

読者を引きつけるための工夫

続いて、『汝自身を知れ』の具体的な内容に踏み込んでみたい。著作タイトルの副題に含まれたキーワードのとおり、その主題に選ばれているのは「生理学」である。しかし実際には生理学という表向きの内容に、やや強引な形で科学技術の解説がフィギエによって差し挟まれていた。その結果として「生理学」という本来のジャンルから逸脱した記載も目立ち、この著作は少々一貫性に欠けた不自然な構成にもなっている。

例えば「いかに呼吸するか」と題された章を見てみよう。表向きは気管支や肺など呼吸器の仕組みを解説し、呼吸の重要性を紹介する箇所となっている。しかしフィギエはこうした説明に加え、新鮮な空気を吸えずに窒息してしまった近年の不幸な事故についてもその詳細を具体的に紹介したうえで、必要となる換気装置（ventilation）について次のように説明している――

自然換気、あるいは人工的な手段による換気装置は、こうした深刻な不幸を打開するものである。残念ながら換気を確保するための実用的な方法にはまだ不十分な点が多く、各個人に必要な空気の量を供給するにはほど遠い。我々人間の諸機能が正常に作用するためには成人1人あたり理論上、1時間につき10立方メートル、24時間につき240立方メートルの空気が供給される必要があると衛生学者たちは定めている。これは、最も好ましい条件下で呼吸するためには成人1人につき、その周囲に各辺6メートル四方の空間が必要ということになる。¹¹⁾

なお、フィギエは最新の科学技術の動向を解説した科学普及本である『科学の驚異』の第4巻（1870年）でも換気装置について紹介していた¹²⁾。同書「換気装置」の部の冒頭において彼はその重要性を訴えている――

したがって個人の住居、公共の集会場、病院における換気装置の問題は、衛生学者や我々が人類の友にとって、最も気に掛けねばならない事柄のひとつである。¹³⁾

かくして9年前の自身の代表作に含まれた内容である換気装置を、生理学を主

題としているはずの『汝自身を知れ』にもフィギエは臆することなく盛り込んでいるのだ。

こうした「逸脱」とも思われるフィギエの言及は換気装置にかんする解説だけにとどまらない。『汝自身を知れ』の同じく「いかに呼吸するか」の章では、呼吸が困難になる状況として、気球の高度が過剰に上昇した際の搭乗員の、呼吸の観点からみた危険性も詳細に紹介されている。そして彼はこの種の事故を防ぐための助言を次のように言い添えている――

ゆえに我々は人類の利益に鑑みて気球乗りには、8千から9千メートルの高度に挑むために酸素を搭載した容器を装備しようとするのではなく、むしろこうした高みに到達しようとする無謀な行動は慎むよう、単に助言せねばならないと考えている。¹⁴⁾

フィギエが気球に長年にわたって関心を抱いていた事実は1850年の『両世界評論』に彼が執筆した「気球および気球乗り」と題された記事からも確認できる¹⁵⁾。こうした彼の気球への関心はその後、『科学の驚異』の第2巻(1868年)の「気球」と題された部の記述に集約される。この「気球」の部の冒頭においてフィギエが「気球ほど全世界の驚嘆、賞賛、感動を呼び起こした発見はない」と述べている点からも分かるように¹⁶⁾、彼はこの発明品に対して沸き起こる自らの高揚感をもはや隠そうとしない。これまで複数の著述のなかで自らが饒舌に語ってきた主題である「気球」を『汝自身を知れ』にも滑り込ませるフィギエは、著作の趣旨の一貫性を保つことよりも自身の関心の赴くままに得意な話題について筆を走らせ、読者を楽しませる方針を優先していると言えるかも知れない。

さらにフィギエは「人体」の構造を知るという著作の趣旨から外れ、「いかに呼吸するか」の章では植物の光合成についても解説を広げている――

実際、動物たちが酸素を吸いこんで炭酸ガスを吐き出すのに対し、植物は光の作用の下、炭酸ガスを吸収して酸素を放出するのだ。¹⁷⁾

つまり彼は人間にとっての「呼吸」の問題を超え、あらゆる動物たち、さらには植物も含めた生物界全体にまで視野を広げた話題を提供し、読者の好奇心を刺激することを選んでいる。おそらく『汝自身を知れ』において、彼にとっての真の目的は人体の生理学の初歩を体系的に偏りなく読者に伝えることではな

く、むしろ「生理学」の枠組みから逸脱してしまうような話題も、自身が饒舌に語れる情報であれば積極的に提供することで著述家としての自らの強みを読者に披露しようと望んでいるのだろう。

ただしフィギエの目的は自身の知識や才能を誇示することではなく、あくまで読者を退屈させずに楽しませることであったと考えられる。同じく「いかに呼吸するか」の章では、読者自身がひとりで実践可能な科学実験も積極的に紹介している。人間が吐き出す息は二酸化炭素（炭酸ガス）を含み石灰水を白く濁らせるという、今日の日本の初等教育においてもよく知られている簡単な実験について彼の記載内容は次のとおりである――

これは読者諸氏に、ご自身でやっていただきたい実験である。肺から放出される気体のなかに炭酸ガスが含まれていることを確認するには薬局で少量の石灰水を入手して、この液体を何らかのガラス製の容器に入れ、石灰水のなかにガラス製の管、パイプの軸、羽根ペンの軸などを使って息を吐き出すだけでよい。¹⁸⁾

つまりフィギエは手軽な実験を自ら試してみるよう読者に呼びかけ、薬剤の購入の仕方や器具の準備方法にまで言及することで、読者がこの類の科学実験を身近に感じられるよう試みているのだ。

このようにフィギエの場合、生理学の体系そのものを詳細かつ体系的に語ることは必ずしも優先されていない。むしろ自身が得意としている「換気装置」や「気球」の話題、人体の解説の範疇から外れるような話題も積極的に盛り込み読者の興味を引きつけ、さらに簡単な実験をも推奨することで、読者の気晴らしに貢献する工夫が施されていたのである。

最終章に設けられた「死とは何か」

これまで述べてきたようにフィギエは『汝自身を知れ』において読者を楽しませる手腕を存分に発揮しようと試みているが、おそらくその方針が顕著となっているのが最終章「死とは何か」である。一見、生理学の観点から人間の「死」を解説する章であるかのようにも思われるが、実際には死後の魂の不滅性を主張する内容が展開されている。

フィギエはかつて1871年に出版された『死の明くる日』において、人は死を迎えた際に肉体は滅びる一方で、その魂の方は無限に生き続ける旨を主張していた。その序文で彼は読者に対して「汝（tu）」と呼びかけ、次のように述べ

ている——

死の明くる日、汝に何が起こり、汝はどうなるのだろうか。私は汝の肉体について述べているのではない。肉体は汝を覆う衣服や、汝の遺骸を包むだろう屍衣よりも重要なものではない。こうした衣服や、汝が包まれるだろう屍衣と同様に、汝の肉体は腐敗してその諸要素は大気の中、土の中、水の中といった自然の偉大なる物質的な蓄えのなかに消えていくだろう。だが汝の魂の向かう先はどこなのだろうか。¹⁹⁾

この疑問に答えるにあたりフィギエは同時代の生物学や天文学の知識を援用し、異なる動物間で同一の魂が次々と生まれ変わりを続けていること、そして魂の循環は地球上だけで完結するものではなく、この循環システムは太陽を中心とした宇宙規模で作りに上げられていることを主張していた²⁰⁾。彼によれば、『死の明くる日』と題された著作の出版の目的は次のようなものであった——

本書を読むことで多くの人々が、死とは何ら終わりではないこと、死とは我々の天命における一定の偶発事、単純な現象にすぎず、人間個人の存在の継続性を断ち切るものではないと確信を持てるよう、我々は願っている。²¹⁾

こうした彼の考えは8年後に出版された『汝自身を知れ』にも引き継がれている。こちらの著作は人体の仕組みを生理学の観点から解説する名目で出版されたものだが、その最終章で彼は死を次のように説明する——

それでは科学的な視点から見た、死とは何だろうか。我々に言わせれば、それは魂と肉体が分離することである。²²⁾

そしてフィギエは同書においても、肉体は死に際して朽ち果てる一方で、魂のほうは滅びることなく生き続ける、との考えを貫いている。彼はこの著作で「いかに消化されるか」「いかに栄養吸収がなされるか」「いかに血が巡るか」等の章で人体について生理学の立場から内容を展開してきたが、これらは全て、朽ち果てるものとしての部位の解説であり、先述したように彼自身がかつて『死の明くる日』において「重要なものではない」と説明した部位そのものであった。結局『汝自身を知れ』は人体の仕組みを解説する目的の著作であるにもかかわらず、魂の不滅性という概念を通して「死」の捉え方を読者に提示しようとする異質な章が、著作の最後に置かれているのだ。

フィギエは『汝自身を知れ』の最終章の末尾において、次のような表現で著作を締めくくっているが、これはまさに人の魂が肉体の死後も生き続けること

を主張した『死の明くる日』の方針とも重なるものである——

死はゆえに人間の終わりではなく、その変容であり、天上の空間へと入るための契機なのだ。墓は第二の人生の揺りかごなのだ。²³⁾

1871年に出版された『死の明くる日』は、フィギエの科学普及活動家としての経歴のなかで転換点となった著作として先行研究では位置づけられてきた。その転換の契機として指摘されているのは、フィギエが同書の構想時に息子を亡くしている事実である²⁴⁾。ギヨーム・キュシェの研究によれば、「当時最も知られた科学普及活動家」であったフィギエも1870年代以降には「一種の心霊主義に転向する」と説明されている²⁵⁾。つまりフィギエはこの著作を境に、真正な科学の普及に努めていた方針から大きく転換して非科学的な事象に関心を持ち始めたとして研究者のあいだでは理解されているのだが、しかし実際に彼の著作を検証してみると、そうした指摘には若干の疑念も生じる。なぜなら彼の転向の「前」にあたる1860年の『近代における驚異の歴史』(*Histoire du merveilleux dans les temps modernes*)と、転向「後」の時期に出版された1892年の『科学の神秘』(*Les Mystères de la science*)の記述はほぼ重複しており、いわゆる非科学的な事象とされる「悪魔憑き」にかんする解説は双方で主要な位置づけをなしている点からも²⁶⁾、フィギエの経歴のなかに明確な「転向」があるとは断定しにくいからだ。

結局のところ、「転向」があったとされる時期以降もフィギエは科学の側に立つ姿勢を放棄することはなかった。実際、1879年の『汝自身を知れ』においても、記載の大部分は生理学の「真正な」知識の提示に割かれており、そこに逸話として挿入される科学技術やその周辺に付随する記載も、正しき科学の範疇の解説となっている。フィギエの場合、1871年の『死の明くる日』の8年後に出版された『汝自身を知れ』でも、依然として「科学」の側に留まり続けようとしており、この著作において正しき科学知識や科学技術について記載する姿勢と、魂の不滅性を正当化する姿勢が共存していたことが確認できるのだ。

フィギエが『汝自身を知れ』の最終章に「死とは何か」と題された章を設けたことで、真正な学術領域としての「生理学」の延長線上につながる形で、魂の不滅性にかんする議論が提示されるに至った。その結果、彼の提唱した「死」の捉え方も読者に違和感なく受け入れやすいものになっていたと思われる。当

初は人体の仕組みを楽しく学ぼうと副題の「生理学」のキーワードに惹かれてこの著作を手にとった人々も、知らず知らずのうちにフィギエが整えた論理の展開に乗せられていく。もっぱら科学の見地から「生」について扱ってきた後に、「死」を論じる最終章を据えたのは、彼が「生」と「死」の間に断絶を置くことを拒否し、肉体の死後も生き続けると信じた魂の存在を、読者へ前向きに示したいと望んだからなのかも知れない。

結 語

以上のように本稿では『汝自身を知れ』を中心に分析し、タイトルに込められた意図や出版の目的、構成や著述内容の工夫、最終章で「死」が扱われている意義について考察を進めてきた。

その記述を検証した結果、同書は表向きには生理学を主題に据えたものでありながらも、実際にはフィギエが得意とした話題である同時代の科学技術の解説を大いに含むものであった。またタイトルや副題にも「死」や「魂」といった語は全く含まれていない著作でありながらも、魂の不滅性にかんする議論がその最終章に盛り込まれるなど、著者自身の関心を存分に反映させた内容になっていた。フィギエは『汝自身を知れ』に、初歩的でありつつも真正な学術知識を基盤とし、そこに読者を楽しませる要素を随所に入れ、彼らを満足させる仕組みを作り上げていたのだ。さらに『汝自身を知れ』においては、正しき科学知識の提示と魂の不滅性の主張がフィギエのなかで共存していたことが確認できる。肉体の死後もその魂は無限に生き続けるという最終章の話題が、表向きには「生理学」の枠組みのなかに組み込まれて提示されることで、彼の最終章の主張がいつそう強調される結果になっていると言えるだろう。

註

＊）本稿は JSPS 科研費：課題番号 21K12855 および 24K15911 の助成を受けた研究の一部である。

- 1) Bruno BÉGUET, Maryline COQUIDÉ et Ségolène LE MEN, *La Science pour tous*, Paris : Réunion des musées nationaux, 1994, p. 10.
- 2) Daniel RAICHVARG et Jean JACQUES, *Savants et ignorants*, Paris : Éd. du Seuil, 1991, p. 59.
- 3) BÉGUET, COQUIDÉ et LE MEN, *op. cit.*, p. 12.

- 4) Louis FIGUIER, *Les Merveilles de la science*, t. I-IV, Paris : Furne, 1867-1870.
- 5) FIGUIER, *Connais-toi toi-même*, Paris : Hachette, 1879.
- 6) FIGUIER, *Les Merveilles de la science*, t. I, *op. cit.*, p. 2.
- 7) FIGUIER, *Connais-toi toi-même*, *op. cit.*, p. 2.
- 8) *Ibid.*, p. 3.
- 9) *Ibid.*, p. 12.
- 10) BÉGUET, COQUIDÉ et LE MEN, *op. cit.*, pp. 13-14.
- 11) FIGUIER, *Connais-toi toi-même*, *op. cit.*, p. 263.
- 12) FIGUIER, *Les Merveilles de la science*, t. IV, *op. cit.*, pp. 349-414.
- 13) *Ibid.*, p. 349.
- 14) FIGUIER, *Connais-toi toi-même*, *op. cit.*, p. 279.
- 15) FIGUIER, «Les aérostats et les aéronautes», *La Revue des Deux Mondes*, t. VIII, 1850, pp. 193-245.
- 16) FIGUIER, *Les Merveilles de la science*, t. II, *op. cit.*, p. 423.
- 17) FIGUIER, *Connais-toi toi-même*, *op. cit.*, p. 248.
- 18) *Ibid.*, p. 245.
- 19) FIGUIER, *Le Lendemain de la mort*, 9^e éd., Paris : Hachette, 1889, p. 1. なお、この著作の初版は 1871 年である。
- 20) 拙稿「科学普及活動家ルイ・フィギエと死後の魂をめぐる問題」, 『科学史研究』第 294 号, 日本科学史学会, 2020 年, 99-112 頁。
- 21) FIGUIER, *Le Lendemain de la mort*, *op. cit.*, pp. 7-8.
- 22) FIGUIER, *Connais-toi toi-même*, *op. cit.*, p. 603.
- 23) *Ibid.*, p. 614.
- 24) 実際にフィギエ家の墓を確認したところ、息子の没年は 1867 年と墓碑に刻まれているが、次の著書では息子の没年は 1870 年と、おそらく誤って記載されている——RAICHVARG et JACQUES, *op. cit.*, p. 60.
- 25) Guillaume CUCHET, «Le retour des esprits, ou la naissance du spiritisme sous le Second Empire», *Revue d'Histoire moderne et contemporaine*, n° 54, 2007, pp. 74-90.
- 26) 拙稿「超自然への関心と科学普及活動——ルイ・フィギエ『近代における驚異の歴史』」, 『フランス語フランス文学研究』第 115 号, 日本フランス語フランス文学会, 2019 年, 161-174 頁。